■　シャンシャンの独り立ち　■

イルミネーションに彩られた通りに、店からジングルベルが流れ出る。デパートは大きなツリーを構え、客を迎え入れている。街は今クリスマス一色である。皆さんはご存じかどうか、なんと本校校門の両側の生け垣にもわずかな数だが電飾が点滅している。

これまでで最も面白いと思ったツリーは、昨年の上野駅で見かけたものである。パンダのぬいぐるみがちりばめられ、「PANDAFUL CHRISTMAS」とあった。上野動物園では、ジャイアントパンダのシンシンに赤ちゃん生まれ、上野はパンダで大盛り上がりだった。洒落たネーミングに微笑ましくなった。

その赤ちゃんシャンシャンは今月に１歳半を迎える。もう子どもである。先月から独り立ちのため、母親と離して暮らすことを始めたという。徐々に別居時間を増やし、年内には完全に単独で暮らすようにするそうだ。野生のジャイアントパンダは１歳半～２歳で親離れする。それに合わせて自立を促している。

話は変わるが、３日前の１６日、卓球のワールドツアー・グランドファイナルにおいて、張本智和(15)が史上最年少で優勝した。ともに卓球選手であった両親の指導のもと、幼少から練習に励んできたが、ここ数年で世界上位に食い込むようになってきた。

決勝の前、報道がそんな彼の最近の変化を伝えていた。試合会場で父親と激しく口論する場面が多く見られるようになったという。ＴＶではいくつものそういう場面を映していた。彼が世界の頂点へたどり着くために父親を超えようとしているように見えた。結果、自立へ踏み出した若者は世界の頂点に立った。

さて、明倫生の自立はどうか。

冬に近づくにつれ、自家用車で学校へ送ってもらう生徒が増えている。確かに北陸の冬は厳しい。寒さだけでなく、氷雨や風雪、雷となれば、外に出るのも気後れする。それでも、である。子どもが生きる未来社会に親の庇護は存在せず、自分の力のみを頼りに生きて行かねばならない。だとしたら、親への依存心や子どもへの過保護が自立の阻害になることを知って、生徒も親も一度立ち止まり、どうすべきか検証する必要がある。甘えや依存があるならば、高校生の時に断ち切っておかなければならない。

人間も動物も生き抜くためにはいずれ自立しなければならない。シャンシャンの独り立ちという当たり前のニュースが新鮮に感じられるとすれば、我々の感覚のどこかが間違っている。